

2019年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業  
(発達障害の可能性のある児童生徒に対する教科指導法研究事業)  
成果報告書 (I)

実施機関名 (京都市教育委員会)

1. 問題意識・提案背景

本市における中学校での発達障害支援は、教科別の指導体制や思春期を迎えた生徒たちの自己理解、周囲の生徒との関係の複雑化、生徒指導を中心とした教員の指導スタイル等の理由から、小学校よりも進みにくい現状がある。そこで、平成28年度には、文部科学省委託事業「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期・継続支援事業（発達障害早期支援研究事業）」、平成29年度から平成30年度には、「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業（特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業）」を受託し、京都市立高野中学校において、特別支援教育の視点を踏まえた学校経営方針の作成、個別の教育支援計画・個別の指導計画の運用に関わる分掌や分担及び年間指導計画の見直し、学校全体のユニバーサルデザイン（以下、UDという）化、発達障害の可能性のある生徒に関わるいじめ・不登校対策の推進等に取り組んできた。今年度は、本事業を受託し、京都市立高野中学校、京都市立衣笠中学校の2校において、UDの視点に基づいた授業づくりと、個の特性に応じた支援の充実を教科共通の視点に据え、教科の特性と個の特性に応じた指導方法の改善に取り組んだ。

2. 目的・目標

① 「学び（授業）の質の向上」

UDの視点に基づく授業づくりの取組を基に「個の特性に応じた支援」を組み込み、学び（授業）の質の向上を図る。

- ・教科の違いを超えた共通の視点を明確化し、指導者間で共通理解・共働推進を図る。
- ・授業のUD化の中での個への配慮・支援を進める。

② 「教科の特性と個の特性に応じた指導方法の改善」

教科の特性に応じたつまずきを明確にし、教科の専門性を生かした指導方法の改善を進める。（数学、理科、英語を中心とする）

- ・教科の学習上のつまずくポイントを、学習内容、指導方法の観点から整理する。
- ・個の特性による教科の学習上のつまずきに応じた教科指導法の提案を行う。

3. 主な成果

① 「学び（授業）の質の向上」

- ・特別支援教育の視点を踏まえた学校経営方針や研究主題を作成し、取組を進めたことにより、学校全体でのつまずきのある生徒の支援への意識が向上し、教室環境の整備や授業改善が進められた。
- ・UDの視点に基づいて授業改善を進めたことにより、教科の違いを超えた共通の視点が明確になった。
- ・対象生徒のこれまでの情報を整理・分析することで、より正確で詳細な実態を共有し、

具体的な指導法の検討を重ねることができた。

- ・ 具体物やICT等を活用することで、全体的に生徒の意欲が向上し、対象生徒の理解も進んだため、手ごたえを感じ、積極的に取り組む教員が増えた。
  - ・ 共通シート（後述4.（4）ア参照）を共有したことにより、学級担任、教科担任だけでなく、通級による指導担当、特別支援教育支援員、教育委員会等、多様な視点から、一人ひとりの生徒に対する支援を考えることができた。また、校内においても、足並をそろえて、一人ひとりの生徒に対する支援を行うことができた。
- ②「教科の特性と個の特性に応じた指導方法の改善」
- ・ 教科教育スーパーバイザーによる、授業改善コンサルテーション、研修会を通して、それぞれの教科において授業改善が進んだ。

#### 4. 取組内容

① 教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童生徒に対する指導方法及び指導の方向性の在り方の研究

（1）対象とした学校種、学年

中学校1～2年生

（2）教科名

数学、理科、英語

（3）実施方法

- ・ 教科教育スーパーバイザー（教科指導研究全体総括）が学校訪問し、研究の進捗状況を確認するとともに、発達障害のある生徒への教科指導に関する助言・指導を行うことで、支援方法の確立に迫るようにする。
- ・ 教科教育スーパーバイザー（各教科共通）は職員室に席を設けて、教員が日常的に助言や情報が得られるようにする。両校合わせて週に3日程度配置するとともに、教員研修を月に1回程度両校で持ち、教員の専門性の向上を図る。
- ・ 定期的に両校合同での協議会を実施し、両校の研究の進捗状況等を把握するとともに、教科教育スーパーバイザーから適宜助言を行う。
- ・ 各教科教育スーパーバイザーは両校合わせて月1～2回程度の学校訪問を行い、授業研究に基づく授業のUD化及びそれを前提とした各教科の特性に応じたつまずきやすいポイントの整理、指導法への助言及び講評を行う。
- ・ 指導主事等による学校訪問を適宜行い、学校の状況を直接把握するとともに、学校長、教科教育スーパーバイザー（教科指導研究全体総括）や教科教育スーパーバイザー（各教科共通）、各教科教育スーパーバイザーとの相談を密にする。
- ・ 両校において小中連携による研修会や協議会等を実施し、小中一貫した発達障害支援の充実を図る。

（4）取組の概要

ア 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

##### 各教科共通

- ・ 自閉症の診断があり基礎知識の活用に課題があったり、ワーキングメモリに弱さがあり口頭説明の理解や記憶に困難があったりする生徒等（以下、対象生徒という）の、成育歴やフォーマルアセスメントの結果、学校での様子やつまずき（インフォーマルアセスメント、スーパーバイザー等による見立てや助言）の情報等の基礎情

報を、各校において共通のシートで整理し、関係者全員で共有する。

- ・シートには、つまずき事例や改善の取組、取組の成果と課題も記載し、各教科教員陣による定期的なシートのふりかえり・更新を行う。
- ・UDの視点での授業計画のフォーマットを作成し、そのフォーマットに各授業における支援の必要な生徒について、効果的な取組、効果のなかった取組、その背景・原因の考察を記載し、取組のふりかえりを行う。
- ・個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成や運用、個の特性に応じた授業づくりの工夫、教職員の専門性向上、校内での発達障害に関する理解啓発の推進等について、コンサルテーションや研修会を各校で実施する。
- ・各校において、「研究報告会」を開催し、本市小中学校から多数の教員の参加を得て、取組の成果と課題について発信を行う。
- ・教科（数学、理科、英語）ごとに対象生徒を決定する。
- ・教科教育スーパーバイザーを教科ごとに招請し、授業改善のためのコンサルテーション、研修会を各校で実施する。
- ・対象生徒について、定期テストや、本市の小中学校で実施する共通テスト（「京都市小中一貫学習支援プログラム」対象：小3～中3）における苦手領域等の分析を行う。

#### イ 実施した指導方法（工夫した点）

##### (i) 授業における全体指導、個への指導について

###### 数学

- ・数学では、対象生徒を含め、多くの生徒が図形問題に苦手意識を持っており、パワーポイントを用いた視覚的な支援を工夫してきた。しかし、2年生の対象生徒（ASD）は、視覚の活用については、見た形を記憶に留めて思考を深めることが苦手であると予想されたため（CARD結果より）、パワーポイントの支援だけでは不十分だということに気がついた。
- ・一方で、上記の生徒は、自分で具体物を操作しながら考えることは得意（WISC結果より）であることが予想されたため、単元「図形の性質と証明」では、辺の長さを自分で調整できる図形（平行四辺形）教材（※オリジナルで製作）を個別に渡しておくようにしたところ、学習に向かう意欲が高まり、注意を向けやすくなった。「平行四辺形の性質や、平行四辺形になるための条件を理解する」というねらいにも迫ることができた。
- ・また、上記の生徒は、定期テスト、本市の小中学校における共通テストの結果は、5～6割程度の得点に留まっており、問題内容と答案を分析したところ、小学校中学年までの基礎的な学習内容は習得しているが、それらの知識を活用するに至っていない様子が見られている。今後は、有効と考えられる具体物の操作や、直接体験の場面を意識して設定していきたいと考える。その際、UDで対応することと、個別の支援として対応することについて、整理して単元構想を計画する予定である。

###### 理科

- ・中学校1年生の対象生徒（LD・ADHD疑い）は、読み書きの弱さがあり、小学校時代にLDの診断がおりている。さらに、白地が眩しいという本人の訴えもあって、アーレンシンドロームが疑われており、専門機関に受診予定である。また、令和元年度、発達検査を受け、聴覚のワーキングメモリにも弱さがあることが分かり、同時に、

注意集中の弱さも指摘された。今後、弱さを支える機器活用（タブレット端末）について、検討・検証をしていく必要があることを確認した。

- ・また、上記の生徒は、定期テストの分析から、実験や実習で、実際に見たり聞いたり体験したりしたことはよく覚えていると考えられ、今後、教員に代わってモデル提示をする等、体験を通じた学習の機会を増やしていく必要があることを確認した。

#### 英語

- ・中学校1年生の対象生徒は、授業中の緊張が強く、学習内容の理解に至りにくい。緊張する原因として、「見通しを持ってない時間が苦手」「学習内容の理解に自信が持てない」「自分から発信することが苦手」等が考えられる。座席を最前列にして、教員が声をかけると、体調が悪いことや、問題の意味が分からないこと等を伝えてくるようになったり、全員で答えられる場面を設定すると達成感を持ったたり等する姿が見られるようになった。
- (ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）
- ・中学校2年生の対象生徒は、数学において、事前学習プリントの数字を入れかえて出題すると、5回のテストのうち、3回は8割以上を取る等、一度解いた問題は解ける様子が見られた。また、1からの証明問題等、文章での記述が難しい問題については、口頭であれば答えることができるものもあった。できることをその都度褒めることで、自信を持った様子が見られた。

## 5. 今後の課題と対応

### (1) 学び（授業）の質の向上

- ・生徒の学習意欲や自己肯定感を高めるために、教科を超えた共通の視点として①環境作り、②展開の構造化、③学習のスマールステップ化、④情報伝達の工夫、⑤協働化（生徒同士の学び合い）等についてさらに研究を進め、全ての生徒にとって分かりやすい授業（授業のUD化）を教職員全員で実行する。
- ・授業のUD化及び各教科における教職員の指導力、専門性向上を推進するために、教科教育スーパーバイザー、ICTアドバイザー、及び指導主事による助言内容を、共有フォルダを介して日常的に両校で共有する。

### (2) 教科の特性と個の特性に応じた指導方法の改善

- ・定期テストや、本市の小中学校における共通テストで、教科や領域ごとに、対象生徒のつまずきの傾向を分析する。
- ・つまずきの傾向を踏まえて計画し、実践、評価、改善（PDCAサイクル）を行い、個の特性に応じた理解しやすい授業づくりを目指す。
- ・UD及び個別の支援について、教科ごとに支援のタイミングや内容等を整理する。
- ・教科会や総合育成支援部会を土台とした、校内研究体制を構築し、持続性のある支援につなげる。

## 6. 問い合わせ先

組織名：京都市教育委員会

担当部署：指導部 総合育成支援課